

Readings

Prov 8:22 יְהוָה קָנָנִי רֵאשִׁית דְּרָכָו קָדָם מִפְּעֻלֵי מַאֲ:  
Prov 8:23 מְעוֹלָם נִסְכַּתִּי מִרֵאשִׁי מִקְדָּמֵי־אַרְצִי:  
Prov 8:24 בְּאֵין־תְּהַמּוֹת חוֹלְלָתִי בְּאֵין מְעִינֹת נִכְבְּדֵי־מַיִם:  
Prov 8:25 בְּטָרָם הָרִים הִטְבַּעוּ לִפְנֵי גְבַעוֹת חוֹלְלָתִי:  
Prov 8:26 עַד־לֹא עָשָׂה אֶרֶץ וְחוֹצוֹת וְרֵאשִׁי עֲפָרוֹת תְּבַל־:  
Prov 8:27 בְּהִכְיֵנו שְׁמַיִם שָׁם אֲנִי בְּחֹקוֹ הוֹג עַל־פְּנֵי תְהוֹם:  
Prov 8:28 בְּאַמְצֵי שְׁחָקִים מִמֶּעַל בְּעֵינֹת תְהוֹם:  
Prov 8:29 בְּשׂוּמוֹ לֵים | חָקוּ וְמַיִם לֹא יַעֲבְרוּ־פָּנָיו בְּחֹקוֹ מוֹטְדֵי אֶרֶץ:  
Prov 8:30 וְאַהֲיָה אֶצְלוֹ אֲמוֹן וְאַהֲיָה שֶׁעֲשָׂעִים יוֹם | יוֹם מְשַׁקֵּת לְפָנָיו בְּכָל־עַתָּה:  
Prov 8:31 מְשַׁקֵּת בְּתַבֵּל אֶרֶץ וְשֶׁעֲשָׂעִי אֶת־בְּנֵי אָדָם: פ

Rom 5:1 Δικαιωθέντες οὖν ἐκ πίστεως εἰρήνην ἔχομεν πρὸς τὸν θεὸν διὰ τοῦ κυρίου ἡμῶν Ἰησοῦ Χριστοῦ  
Rom 5:2 δι' οὗ καὶ τὴν προσαγωγὴν ἐσχήκαμεν [τῆ πίστει] εἰς τὴν χάριν ταύτην ἐν ἣ ἑστήκαμεν καὶ καυχώμεθα ἐπ' ἐλπίδι τῆς δόξης τοῦ θεοῦ.  
Rom 5:3 οὐ μόνον δέ, ἀλλὰ καὶ καυχώμεθα ἐν ταῖς θλίψεσιν, εἰδότες ὅτι ἡ θλίψις ὑπομονὴν κατεργάζεται,  
Rom 5:4 ἡ δὲ ὑπομονὴ δοκιμὴν, ἡ δὲ δοκιμὴ ἐλπίδα.  
Rom 5:5 ἡ δὲ ἐλπίς οὐ καταισχύνει, ὅτι ἡ ἀγάπη τοῦ θεοῦ ἐκκέχυται ἐν ταῖς καρδίαις ἡμῶν διὰ πνεύματος ἁγίου τοῦ δοθέντος ἡμῖν.

John 16:12 Ἔτι πολλὰ ἔχω ὑμῖν λέγειν, ἀλλ' οὐ δύνασθε βαστάζειν ἄρτι.  
John 16:13 ὅταν δὲ ἔλθῃ ἐκεῖνος, τὸ πνεῦμα τῆς ἀληθείας, ὀδηγήσει ὑμᾶς ἐν τῇ ἀληθείᾳ πάση· οὐ γὰρ λαλήσει ἀφ' ἑαυτοῦ, ἀλλ' ὅσα ἀκούσει λαλήσει καὶ τὰ ἐρχόμενα ἀναγγελεῖ ὑμῖν.  
John 16:14 ἐκεῖνος ἐμὲ δοξάσει, ὅτι ἐκ τοῦ ἐμοῦ λήμψεται καὶ ἀναγγελεῖ ὑμῖν.  
John 16:15 πάντα ὅσα ἔχει ὁ πατὴρ ἐμὰ ἐστίν· διὰ τοῦτο εἶπον ὅτι ἐκ τοῦ ἐμοῦ λαμβάνει καὶ ἀναγγελεῖ ὑμῖν.

Comments

- ・ 今日とは典礼暦C年年間主日の三位一体の主日。キリストの基本教義は典礼暦の中で重要に取り扱われている。すなわち聖霊降臨で復活節が終わり、年間主日が待降節が始まる前の11月まで続く。年間主日はイエスの一連の教えを取り扱う期間であるが、その冒頭に三位一体、来週はキリストの聖体というカトリック神学が置かれている。今日の聖書朗読はヨハネ福音書から取られ、イエスの告別説教の中から弟子たちに「真理の霊が来る」とイエスが述べている箇所が選ばれている。受難と死の後に、聖霊が使徒たちを導くというその内容から、聖霊とイエスが深い関係にあることが分かる。
- ・ 主日のテーマに戻ろう。三位一体ということばは聖書の中で一切使われていない。なぜなら三位一体論は、聖書に記述された時代以降の教会が、異教や異端からの挑戦に答え続けた結果、作り出した神学用語だからである。ギリシア・ローマ哲学、特に新プラトン主義の影響を受けて2世紀から三位一体論は発展し、ニケア・コンスタンチノーブル公会議(381)で定式化された。それは神、イエス、聖霊のそれぞれ(位格)が深い交わりの同質であり、かつ一つであること、逆に言えばこれら三つの位格は分離・混合・生成・変化されていないことを表現しようとしている。では、なぜこのような三位一体というわかりにくい説明が必要であったのだろうか。それは初代教会が直面した異端論争にある。
- ・ 使徒教会から古代教父たちに受け継がれてゆくキリスト教は、東地中海のギリシア・ローマ文化、さらにペルシア文化の影響を濃厚に受けていた。その影響下では、キリスト教を主張していてもその解釈に問題をはらんでいたり、キリスト教に対抗したユダヤ教やマニ教に対して自らを弁明する必要に迫られ、キリスト教であると断言できる条件が常に問われ続け、神理解の条件に適合しないグループは論駁されて異端と退けられた。まずキリスト教最初の異端は、2世紀のマルキオン派である。彼らの主張は、旧約聖書の神は怒り・妬む非情の神であり、新約のイエスこそが愛と慈しみの神であるとしたので、旧約聖書はキリスト教には不要であって、イエスが記されている新約聖書の書物さえも絞り込もうとした。この主張は旧約聖書の父なる神と新約の子なる神を分断することになり、三位一体の関係を壊してしまうので異端と判断された<sup>1</sup>(テリトゥリアヌス『マルキオン反駁』 cf. D・A・v・ハルナック『教義史綱要』久島千枝、1997年、P.52)。このマルキオンの思想は形を変えて、近現代でも再現される。イエスをユダヤ人から切り離すために旧約聖書を燃やしてヘブライ語を地上から無くせば良いと考えたヒトラーである。
- ・ 当然ながら、子であるイエスの神性を否定すると三位一体は成立しない。ユダヤ教は旧約聖書の「主」は、イエスであることを決して認めない。そもそも旧約時代でイスラエルの神は、諸国の神々と異なって、決して形を持たず見ることができないことに際立った特徴がある。目に見えるだけでなく、人々に触れることもできる人間として神が生まれたことをユダヤ人が受け取ることはない。旧約聖書の成就を新約聖書で認める立場をユダヤ人はとらないので、この点がユダヤ教とキリスト教の分水嶺の一つである。
- ・ ではイエスの代わりに自らを神と称する者を三位一体の定義で考えるとどうだろうか。使徒言行録に「偽預言者」に言及されているように(使13:6)、使徒時代からイエスは十字架刑で死んで失敗したので自分がその代わりであるなどと主張する者が現れる<sup>2</sup>。イエスは人類の歴史上、ただ一度限り人として受肉した神である。ところが生き返りを主張する者を認めると、神がもう一人増えてしまって三位一体の定義に当てはまらない。三

<sup>1</sup> テリトゥリアヌス『マルキオン反駁』、D・A・v・ハルナック『教義史綱要』久島千枝、1997年、p.52.

<sup>2</sup> 統一教会・文鮮明、オウム真理教・麻原彰晃など

位一体論は、自分を神と詐称する人間の思い上がりを拒否してきた歴史によって生み出されたのである。

###

【疑問】

最後に、今日の三位一体の主日の典礼朗読は第一朗読に箴言を選んでいる。箴言は神の知恵をテーマにして創世記冒頭の天地創造を思い起こさせている。そこでは「初めに(22, 23, 26節)」「深淵(24, 27, 28節)」という天地創造に使われた独特の用語が繰り返されている。読み手は創世記に記された水の面を動く「神の霊 **רוּחַ אֱלֹהִים** (創1:2)」という表現が現れるのを期待するのだが、同じ天地創造を扱う箴言に「神の霊」が登場していない。つまり、三位一体の主日典礼に、「神の霊」と明記した創世記からではなく、何の言及もされていない箴言から天地創造をわざわざ引用している。???